

教職大学院

Newsletter

No. 62

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.4.19

教員養成改革は大学教員の資質の転換から始まる

福井大学学長特別補佐（三位一体教育改革担当） 松木 健一

国立大学改革プラン（平成25年11月）では、第3期に目指す国立大学の在り方として、「各大学の強み・特色を最大限に生かし、自ら改善・発展する仕組みを構築することにより、持続的な『競争力』を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学へ」の転換を目標として掲げている。そして、残された第2期中期目標期間（平成27年度まで）を国立大学の機能強化に向けた改革加速期間と位置付け、ミッションの再定義で明らかにされる各国立大学の強みや特色、社会的な役割を踏まえ、機能強化に取り組むとしている。

本学の「三位一体教育改革」は、国立大学改革プランに基づく教員養成分野における抜本的機能強化事例として取り上げられ、予算化されたものであり、本学が掲げたミッションの再定義の実現を目指しつつ、同時に自主・自律的な改善・発展を試みる国立大学の教員養成モデルとしての役割を期待されているわけである。

この経過を踏まえ「三位一体教育改革」では、これまで批判の多かった国立大学の教員養成に対して新たなシステムを提案し、大学・大学院・附属学校園の機能連携を強め、実践型教員養成機能への質的転換を図ろうと計画している。とかく実践と理論が分離するといわれる教員養成について、この改革では、実践と理論の間に省察を加える仕組みを構築することで実践と理論の往還を実現することを目指している。

具体的には、教職開発専攻が取り組んできている学校拠点方式を強化し、附属学校園の中に教職開発専攻の一部を移設することで、実践と理論の往還を実現する環境整備を進める。さらに、大学教員に関しても実践と理論の架橋を具現化する人材の採用を進める。例

えば、大学院の教員自身が、附属学校で子どもに実際に授業を行い、その授業プロセスを学部生/院生に公開・表現するとともに、それを振り返り批判的に吟味（省察）し、理論化する省察的实践を行うことのできる教員。あるいは、教職大学院の教員が学校に出かけ、実際の授業の展開を学問的見地から支えると同時に、子どもが学ぶこと、つまり、認識発達を前提として自らが携わる学問体系の再構築を行うことのできる教員などである。三位一体教育改革では、このような実践—省察—理論化のサイクルを展開しながら、自らの実践や協働探究者の実践を題材に大学院教育を行う教員を「研究実践者教員」と呼んでいる。

本年度、附属学校園の4名の教員が、附属学校園を兼務しながら研究実践者教員として、教職大学院に赴任した。実践と理論の往還をまさに個人の中で具現化

内容

- 教員養成は改革は大学教員の
資質の転換から始まる (1)
- 上海師範大学の訪問調査団報告書 (3)
- 学位記伝達式が終了しました (13)
- 開講式が開催されました (14)
- Staff 紹介 (15)
- 院生紹介 (16)
- 研究紀要・実績報告書の紹介 (21)
- 書評 (22)
- 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻/
スタッフ専門分野一覧 (23)
- ラウンドテーブル案内 (24)

する存在として、彼らへの期待が高まっている。しかし、専門職養成という観点から見れば、専門職養成に携わる大学教員が実践-省察-理論化のサイクルに身を置くことは、至極当然のことであり、特段目新しいことではない。専門職とはそのサイクルに身を置く人のことなのである。むしろ、そのことが教員養成大学で行われてこなかったことの方が、大きな歪なのであろう。戦前の師範学校では、人事を含め附属学校との交流は頻繁であり、学生に対しても長期の教育実習が実現していた。

しかし戦後、教育に関する国家統制を警戒するあまり、師範学校制度を全面否定してしまったように思われる。その結果、教師の専門性についての追及を不問に付し、大学教員の都合のよいように開放制を捻じ曲げてきてしまったのではないだろうか。大学教員が専門とする学問分野を各自が学生に学ばせ、それらを寄せ集まれば教員養成になるというような幻想をつくり出し、理論（学問？）は大学で、実践は学校（教育実習）でというような二分法が大手を振ってまかり通ることとなってしまった。言うまでもなく、理論は実践の中の省察から産出され、自らの実践の仮定（足場）となるものであり、実践の中で絶え間ない吟味を受けるものである。教員養成（教師教育）は、教員の資質として実践—省察—理論化のサイクルを体得することが要となる。そして、これを支えることのできる大学教員やカリキュラムの開発が必要なのである。本専攻の研究実践者教員の採用が、大学教員の質的転換の契機となることを期待したい。

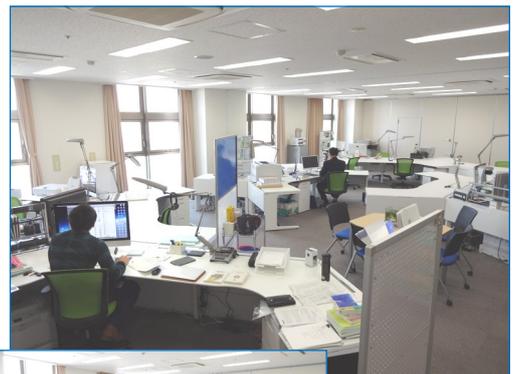
ところで、新規採用の教員ばかりではなく、従来から教職大学院に属する本学教員にとっても大きな変化が起きようとしている。それは、大学教員の協働（collaboration）についての取り組みである。この拙文を目にする方は、大学の教員研究室をイメージできよう。南側に面した2間ほどの間取りに、小さな研究室が行儀よく並んでいる。まるでケージ飼いの養鶏場のニワトリのようである。おまけに、教員養成系学部は、学際的（？）なので、隣同士は異なった専門分野の教員であり、ディスコミュニケーションのまま、それぞれが単独に教員養成の科目を担当しているといった大学が多いのではあるまいか。残念ながら、本学部も例外ではない。

ところで、知識基盤社会では、子どもたちに協働する能力を培うことを求めている。当然のことながら、学校教員同士が協働する経験なくして、子どもの協働を支援できるはずもない。本学の教職大学院のカリキュラムでは、ともかくよく熟議する。院生同士が子どものことや学校のことに関して、語り傾聴すること

を最も大切にしている大学院の1つであろう。そして、このようなカリキュラムを支えるためには、言うまでもなく専門の異なる大学教員同士が協働して授業に向かうことが必須の条件である。つまり、大学自体を学び合うコミュニティに創りかえること、さらにそのための研究に取り組むことが重要となってくる。

ところが、これが難しい。専門の異なる者同士が協働するという事は、目的に向かって役割分担をすることでは成り立たないからである。いま専門の異なる支援者（AとB）がいたとしよう。この時、専門家AとBは、支援を受ける側の目線で自己の行う支援内容を再吟味するだけでなく、支援を受ける側の目線で今度は互いの支援内容を吟味し、相手の専門性を活かすには、自分の専門がいかにあるべきかを問わなければならない。こうやって互いが確定共有できる事柄を増やすことで、ようやく協働が成り立つ。

教職大学院では、このような大学教員同士の協働を特定の授業の中だけで実現するのではなく、日々の教育研究活動の中で頻繁に、しかも効率よく機能的に実現することをめざし、大学教員の研究室の改善から取り組むことにした。教職大学院の一部を附属学校キャンパスへの移設するための準備を兼ね、総合研究棟Iの13階に10人の教員が共用する仮研究室を設置した。コラボ・ラボ（Collabo.-Labo.）とでも言うべき協働研究室が姿を現しつつある。どんな成果を生み出すか、実に楽しみである。福井にお出でになる機会があるならば、是非とも覗いていただきたいものである。



上海師範大学の 訪問調査団報告書

視察団長 森 透



■ 日程及び調査団メンバー

日程：2014年3月16日（日）～19日（水） 上海師範大学ほか訪問調査

調査団メンバー：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）11名
森透（訪問団長）・二宮秀夫・小林真由美・濱口由美・稲垣良介・山野下とよ子・
前園泰徳・山口真希・半原芳子・松井富美恵・中川美津恵

■ スケジュール

3月16日（日）	14時頃	小松空港発
	16時30分	上海・浦東空港着（現地時間） 出迎え：特任教授 劉先生（通訳）・国際交流処 喬（チョウ）さん 劉さんの知人 張さん・娘さん（小4） <バス>
	18時頃	上海師範大学ゲストハウス着
	18時30分	夕食・情報交換会 上海市教育委員会（国際交流処）張さん
3月17日（月）	8時45分	出迎え：劉さん・張さん
	9時頃	上海師範大学数理学院訪問 院長 張 寄洲 教授
	10時過ぎ	大学本部 附属学校統括責任者 施 斌 教授・国際交流処 夏 教授 <バス・地下鉄>
	14時過ぎ	上海市楊浦高級中学訪問 校長 向 玉青 特級校長・高級教師 <地下鉄>
	17時過ぎ	豫園・上海タワーほか
	19時頃	夕食
3月18日（火）	22時頃	上海師範大学ゲストハウス着
	9時	出迎え：劉さん・張さん
	9時30分	上海師範大学一附属小学訪問 曹 校長
	12時頃	上海師範大学に戻る 出迎え：院生M2（施恩賢・韓夢初） <昼食>
	14時頃	教育学院 夏 惠賢 院長（教授）・胡 国勇 副院長（教授）
	16時30分	上海師範大学ゲストハウス・大学内喫茶室へ
	18時頃	夕食
20時30分	上海師範大学ゲストハウス着	
3月19日（水）	9時30分	上海師範大学出発 出迎え：劉さん <バス>
	10時30分	上海・浦東空港着（飛行機が大幅に遅れ）
	15時10分	上海・浦東空港発
	17時15分	関西国際空港着
	18時16分	JRにて関西国際空港発
	22時07分	JR福井駅着

■ 感想とコメント

各メンバーからの訪問記が本号と次号のニューズレターに掲載される予定なので、11名の訪問団それぞれの視点からのユニークな感想やコメントをお読みいただければ幸いです。ここでは私自身が一番印象に残ったことについて述べたい。昨年3月にも院生を



連れて上海師範大学を訪問したが、今回特に注目していたのは上海師範大学の教師教育を中心的に担っている教育学院への聞き取り調査であった。昨年は陳永明院長との懇談が非常に印象に残っており、陳院長はすでに退職された関係で今回は夏院長と胡副院長に対応していただいた。特に胡副院長は日本に留学されていた経験もあり日本語が非常に上手で、教師教育に関する深い話が日本語でできたことが非常に良かったと思う。私からの質問は主に以下の3点であった。

- ①現場の学校をベースとした教師教育をしているのかどうか。大学と学校との協働研究の関係はどうか。
- ②学部卒の院生は学校へのインターンシップをしているのかどうか。
- ③教育委員会との関係はどうか。

以下に聞き取りの内容について報告したい。

①については、基本的に現職の院生の学校と大学とのつながりは深く、勤務しながらの大学院なので、授業は土曜日・日曜日、及び長期休暇を利用しているとのことであった。この点は福井大学と共通している。大学での授業の中身については具体的に聞くことが出来なかったが、学校をベースに大学院を運営している点は共通していると思われる。講義中心の授業なのか、事例研究をもとにしたカンファレンスをしているのか等についても、次の機会に是非お聞きしたいと考えている。実は当日の午前中に附属第一小学校を訪問



教育学院の夏院長

したが、校長からは大学からは研究者がほとんど来ないということをお聞きしたのでこれについても質問したが、十分な回答はなかったように思う。



教育学院の胡副院長

聞き取りの中で特に興味深かったのは、管理職養成に関してである。新任校長の研修を大学院で行っているとのことであるが、10名くらいの新任校長グループを作り、その中に大学スタッフも入って研修をしているとのこと。研修の中身としては、10名の各学校に全員が訪問しそれぞれの学校の現状や課題を直接観察し、観察後に全員で事例研究によるカンファレンスを行っているとのことである。具体的にどのようなカンファレンスなのかについては聞き取れなかったが、管理職の研修に関して、講義中心の研修ではなくグループの各メンバーの学校を訪問しその具体的事例を基にした形の研修は非常に意味のあるものであると考えられる。福井大学でも今後、管理職養成コースを設置していく方向なので非常に参考になるのではないかと思います。

②インターンについては詳しく聞き取ることが出来なかったが、半年程度インターンを行っているとのことであった。今後、インターンを行っている院生に直接インタビューする機会があれば期待している。

③教育委員会との関係についてはほとんど聞くことができなかった。3月16日の訪問第1日目の夜に、上海市教育委員会の張さんと夕食をご一緒できたが、大学との関係についてはあまり聞くことが出来なかった。昨年訪問したときに陳院長(当時)のプレゼン資料(パワーポイント資料)には大学と上海教育委員会との関係図が示されていたが、実際にどのように運営されているのか、機能しているのかについては今後聞き取りを続けていきたいと考えている。

以上が特に私が印象を持った教育学院との会談内容であるが、最後に学校拠点の教師教育を精力的に実践している東北師範大学についてお聞きしたが、胡副院長の評価はそれほど高くなかったように思われる。今後、福井大学の私たちとしては、「協定書」を結んでいる上海師範大学だけではなく、中国全土の教師教育実践を視野に入れて研究交流を行っていきたいと考えている。さらには、日本教師教育学会が東アジア教師像を継続して研究していることから学びながら、中国だけではなく東アジア教師像を提示しているアジア諸国とも研究交流を行っていければと考えている。

(2014年4月4日)

上海師範大学を視察して

福井大学教職大学院 准教授 稲垣 良介

今回の視察では、教育委員会、大学、小中高等学校がそれぞれに高いプロ意識をもって、人材育成を行っていること、競争の中でそれぞれ個や組織が力量を高めていることを肌で感じた。例えば、「実質的に子どもの能力を高め、世界で通用する人材を育成する」（上海市楊浦高級中学校校長、向玉青特級校長・高級教師）、「子どもはいつも正しい、ミスは教師にある」（上海師範大学第一附属小学曹校長）という言葉には、グローバル社会の中で自己責任のもと展望を拓く子どもに教育し卒業させる、という教育現場の強い決意を感じた。上海師範大学教育学院胡国勇副院長（教授）の説明によれば、例えば、校長の力量形成のため法律、教育、管理、財務の専門家との研修が実施され、上記の教育現場の決意には研鑽に裏打ちされた自信や信念があると感じた。上海市の教師の力量形成システムが競争の中で構築されるのはやや意外であった。教師の研修は「組織的メカニズム」が法律で定められており、幼～高等学校まで授業研究が義務化される。教師は、まず各学校でいわゆる名教師が特級教員として選抜される。特級教員は周辺の学校からさらに選抜され地区の特級教員となり、最終的に上海市19区から選抜された者が指導的立場になる“ピラミッド型システム”が構築されているとのことであった。その過程で脱落（退職）する教員も珍しくないとのことである。上海師範大学第一附属小学校曹子論校長は、「明日配置替えがあっても不思議ではない」と語っていたが、ある種の緊張感の一端はこのようなシステムが影響しているだろう。ちなみに、上海市楊浦高級中学の教室には体力テストの結果一覧、総合評価が掲示され、生徒に示されていた。日本の学校では、優秀者を周知することはあっても、全員の結果（成績）を明らかにする学校はあまりみかけない。競争の一端が垣間見られたシーンであった。

視察中、あらかじめ希望して、上海師範大学第一附属小学校6年生の体育の授業（写真）を参観させていただいた。その内容は、集団行動や体づくり運動に近いものであった。3クラスの担当教員（教科担任）がいずれも自信に満ち溢れた指示を子どもに与え、次々に活動を変化させ授業を展開した。4列横隊から体操の隊形へと編隊す



る子どもの動きから、日常的に集団行動が鍛えられていることは明らかであった。1時間の参観で結論めいたことを言うつもりはないが、参観授業は、事前に得ていた知識



を指向した最新の中国における体育授業とは異なる印象をもった。教師主導で行われる体づくり運動のような授業について、同行の視察者が「日本では教科専任でなくともこれくらいの授業をする…」と語った。その通りだと思う。しかし、徒手体操を行っていたあるクラスが授業の終盤にバレーコートでアンダーサーブの練習を始めたことに興味をもった。上海師範大学数理学院訪問時に覗いた附属中学校にも屋外の立派なバレーボールコートがあった。日本では、種目主義的な授業は一昔前のものと片付けられることがある一方、発達段階に即した技能の系統性が課題となっている。授業終了前に移動することになったため、どのような意図で授業が展開されたのか正確にはつかめない。しかし、発達段階に応じて核となる教材の基底技能を意図的に体づくり運動の中に取り入れられているとすれば、教科専門の授業展開の在り方として学ぶべきことである。なお、一人っ子政策と関連した子ども肥満の問題について関心があったが、参観させていただいた3クラス中に明らかな肥満児は一人も見受けられなかった。むしろ、（見学者は2名いたものの）体育授業参加児童はいずれも活動に対して大変意欲的であったことのほうが印象に強い。

視察は瞬く間に充実のうちに終了した。専門を極めようと努力すること自体が重要であるとの認識に変化はない。研究課題をグローバルな視野で捉えることが不可欠であると再認識できた。視察による成果は今後の教育研究に確実にもたらされると確信する。このような機会をいただいたき感謝している。

上海の美術教育を探る

～上海師範大学附属第一小学校の視察を基に～

福井大学教育地域科学部美術教育サブコース 教授 濱口 由美

1. はじめに

「芸術教育は、子どもたちの全人的な発達を促し、創造性を育むためにもっとも重要であると考えています。」

附属第一小学校の若き曹校長先生は、意見交流会の冒頭でこのように話されました。短い滞在時間ではありませんでしたが、芸術教育を核とした学校教育を目指している校長先生がマネージメントされていることもあってか、ここでは美術教育を通して上海と日本の教育の差異について考えることのできる視点をたくさん見つけることができました。

そこで、本稿では附属第一小学校における美術科の授業や校内で見つけた子どもの造形活動内容について私見を踏まえて紹介するとともに、日本の小学校における美術教育を捉え直すための課題を表出させたいと思います。

2. ウェルカムギャラリーから

附属第一小学校は、上海師範大学から徒歩で約15分、幼稚園やマンションのような住宅が並ぶ通りにありました。到着すると、私たちの訪問を歓迎する大きな電光掲示板が目に入ってきました。少々の緊張を味わいながら、レッドカーペットの上を歩いていくと、一気に気持ちいを朗らかにさせてくれるウェルカムギャラリーがありました。まずは、このウェルカムギャラリーに展示されていた子どもたちの作品を通して、上海の美術教育の方向性を捉えてみたいと思います。

(1) 題材の手渡し方

ウェルカムギャラリー（写真1）には、1年から6年生までの子どもたちの作品がたくさん展示されています。興味深いことに、展示作品の多くは、学年を問わず同じ描画材料（クレパス・サインペン等）・同じテーマ



写真1 ウェルカムギャラリー（低学年）

マ（中国語で「未来的汽车」：日本語で「未来の自動車」）で描かれたものでした。そのため、よく似た作品ばかりだなあといった印象を持ってしまうのですが、学年ごとの作品を見比べてみると、テーマとの関わり方や表現方法から、子どもたちの発達段階に合わせた系統的な学習内容が組み込まれていたことに気がきます。まずは、そのことに着目して、上海で取り組まれている美術教育の実際を探ってみましょう。

「未来的汽车」は、「空想画」を描く題材として設定されたものです。指導者は、子どもたちの発達段階に合わせて、「空想画」としての題材をどのように手渡していったのでしょうか。

低学年が描いた作品の多くは、笑顔の子どもたちが車を運転しています。運転者は、おそらく「私」なのでしょう。描かれた背景と重ね合わせながら作品を見ていくと、運転している「私」たちから、「もうすぐ虹の橋を渡るぞ!」「お魚たちと競争しよう」といったような声が届いてきます。指導者は、「自由に遊びにいくことのできる車があったら、どこへ行きたいかな。何をして遊びたいかな」といったような言葉がけで、子どもたちの冒険心や遊び心をくすぐり発想を膨らませたのではないのでしょうか。

中学年になると車の内部の様子が丁寧に描かれている作品（写真2）が目立ってきます。リビングやベッドルームといった日々の暮らしに必要な部屋がいくつも完備されているもの、不思議な機械が並ぶ操縦室、遊具が

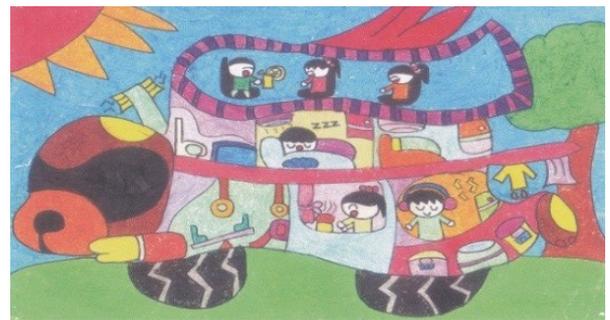


写真2 3年生の作品 一小学校絵葉書より

設置された公園のような場をもっている車もあります。もしかすると、多様な役割をもった未来の車を誕生させるために、「未来は、乗り物の中で暮らしているかもしれないよ」「学校も家も仕事場もみんな乗り物になっていたらどうしよう」といった発想の種を蒔いたのかもしれない。

さて、高学年になると画面（写真3）からは人の姿が極端に減ります。その代わり、重々しい声で「汚染さ



写真3 高学年の作品

れた大気を浄化しながら飛ぶ空気清浄器号」「緑の地球を取り戻すための植林号」と呼んでみたくなるような車が描かれるようになります。自動車と人物との関係性をベースに想像を膨らませていく中学年までの課題から、自動車と環境との関係を問う対社会的な課題へと発展させていることが読み取れます。

今の地球の環境問題などと向き合いながら、より良い環境をつくりだす、未来の自動車を考えていったのでしょうか。こんなふうにつえていくと、高学年の「未来的汽车」は、まさにESD教育だったのかもしれない。

(2) 多様な表現方法の活用

題材の手渡し段階を含めた表現の始まりは前述のように、教師主導の一斉学習で進められていたと思います。しかし、画面の細部からは、その後の表現プロセスが多岐にわたっていることが十分に見取れます。ここからは、自分の抱いたイメージをどのような方法で表現していったのか、技法的なことから見たいと思います。

低学年の作品では、スタンプングやスクラッチ（ひっかき）といったモダンテクニックの技法を使っている作品を何点か見つけました。中学年になるとぼかしや濃淡、グラデーションといった技法を意識的に使っている作品もありました。更に高学年では、それらの技法を効果的に活用したり乗り物が立体的にみえるような描き方が工夫されたりしています。自らの思いを伝えていく表現方法を試行錯誤しながら探り出すといった問題解決型の学習方法で取り組むことの多い日本では、模索した苦労の跡や偶発的に生まれた産物などがよく画面に表出されています。しかしながら、ウェルカムギャラリーの展示作品には、そういった痕跡や副産物がほとんどありません。自分のイメージを表現させる効果的な表現技法を子どもたちが自在に選択し活用しているように見えます。視覚言語のツールとなる造形要素や技法が段階的に習得できるような系統的学習がなされていることをこういったところから強く感じました。

また、全学年にまたがる傾向として、車体が動植物の形態と車の機能を掛け合わせたものや、「模倣」から出発してデザインされたと思われるものが多くみられます。「ファンタジーの二項式」といったような創作法の紹介やモデル作品の提示といった手厚い学習支援の中で、個々の発想を引き出してきたのでしょう。

3. 校内のパブリックアートから

附属第一小学校では大勢の人たちが行き来するような場所に、子どもたちの造形活動を活かしたパブリックアート（ここでは、子どもたちの手の入った共同作品をこう呼びたいと思います）が設置されています。校舎の壁や扉に子どもたちのアートを活用するといったことは日本でも珍しくなくなってきていますが、ここからは、附属第一小学校のユニークなパブリックアートに着目していきます。

(1) 渡り廊下の壁面を活かしたパブリックアート

写真4と5は、校舎と校舎をつなぐ屋上の渡り廊下のパブリックアートです。子どもたちの手を活用したスタンプング作品と、パウル・クレーの作品を彷彿する色と線が楽しく合奏しているような作品です。どちらも、現代美術のユニークな手法が取り入れられています。それらを描いた子どもの名前が作品のあちこちに記されていますが、子どもの発想や思いから生まれたものといった印象は、あまり受けません。全体像は、共有スペースにおける長期展示を意識した指導者によってデザインされたのではないのでしょうか。



写真4 校内のパブリックアート



写真5 校内のパブリックアート

日本の図画工作科でも、現代美術のユニークな表現方法を用いた造形活動は、「造形遊び」といった領域の中でよく見かけますが、それらは、あくまでも材料や場に働きかけるためのきっかけをつくるものであり、大人の美術の世界に子どもたちを巻き込むことを直接的な目的とはしていません。また、棒人間のような表現方法に対しては、「写実性の高い

表現を目的とした指導の積み重ねが、子どもを絵画の楽しみから遠ざけてきた。棒人間表現は、そういった指導から脱落していった子どもたちの抵抗の狼狽」といった研究報告がなされていることもあり、こういったパブリックアートの表現方法としては懸念されるでしょう。しかし、棒人間を堂々と活用したこのような作品を見せつけられると、固定化した考えを再考する必要性を思い知らされます。

写真6は、ホームルームの扉です。学級ごとに、チェーンや木切れといった様々な材料を用いて装飾されています。

クラスごとに子どもたちがアイデアを出し合って制作したのでしょうか。学級目標のような合言葉や一人一人の名前が記されている扉もあったので、毎年子どもたちの手でリニューアルされているのかもしれませんが。学校生活のいたるところに、このような機会を設けることは、自分たちの生活空間をより楽し



写真6 ホームルームの扉

くより美しいものへとつくり変えるといった美術の役割や美術を学ぶことの意義を子どもたちに感じ取らせることにもつながるでしょう。

4. 小学校の美術（美術）室から

(1) 「元宵灯会（ランタン祭り）」を描く授業

美術教室では、3学年の子どもたちが「元宵灯会（ランタン祭り）」を題材とした絵を描いていました。

美術教室といってもそのつくりは普通教室とほとんど変わらず、水道や洗い場も設置されていません。日本で一番ポピュラーな描画材である水彩絵の具が、「未来的汽车」を描いたどの学年の作品にも見かけなかったのは、こういった教室環境が影響していたのかもしれませんが。その代わりに、クレパスやサインペン・色鉛筆といった複数の描画材が一人一人の机の上に所狭しに並んでいました。また、教科担任制が導入されている上海の小学校では、低学年であっても美術科の専門教員が指導にあたります。

「元宵灯会」は、春節（1月下旬から2月中旬）を祝う中国の伝統的なお祭りです。春節には、中国の至る所で「元宵灯会」が行われているそうです。子どもたちの描いている「元宵灯会」は、自分たちがつくった提灯も描かれているので、小学校あるいは地域で開催された「元宵灯会（ランタン祭り）」なのでしょう。残念ながら導入の活動を見ることができませんでしたが、指導者の先生は短時間の説明だけで活動に入らせたのでしょう。黒板には「構図—人物・灯」と「上色」といったポイントしか示されていませんでした。それにもかかわらず、みんなが集中して描くことができていたのは、自分

が参加した、あるいは計画した「元宵灯会」のことを伝える「生活画」だからだと納得しました。

一人一人の構図がよく似ているのは、教科書や黒板に貼られた作品（元宵灯会の様子を描いた子ども作品）などを



写真7 3学年美術科の授業風景

参考にしていたからでしょう。ほとんどの子どもが、教科書の同じ頁を開いていました。後方席の子どもの教科書を少しだけ借りてみると、日本の図画工作科の教科書とかなり編集方針が異なることに気付きました。日本の教科書は、子どもたちが実際につくったり遊んだりしている活動写真がたくさん掲載されていますが、上海の教科書にそういった活動写真を見つけることはできませんでした。その代わりに、作品の製作手順や方法、参考作品といった物が題材事に記されていました。こういったところにも、つくったりみたりする活動のプロセスそのものに重きを置く日本の美術教育と、知識や技能の習得に重きを置く上海の美術教育との違いが見て取れます。

また、日本では教科書を開いて活動している図画工作科の公開授業をあまり見かけません。「使わない教科書をなぜ配布するのか。」といった厳しい声が浴びせられたこともあった日本の図画工作科の教科書。教科書を自分のペースや課題に応じて活用できる学習の手引のようにしている附属第一小学校の子どもたちの姿から、教科書の役割や活用方法についてもう一度再考する必要性を感じさせられました。

(2) 模倣を活かした指導

美術教室に掲示された様々な学年の子どもたちの作品をみてみると、

「空想画」や「生活画」の他に「模倣画」にも熱心に取り組んでいることが分かります。

写真8は、ゴッホのひまわりの鑑賞活動から生まれた「模倣画」でしょう。但し、ゴッホの描き方に近づくといい模倣ではなかったことが、子どもたちの描



写真8 「ひまわり」の模倣画

いたひまわり作品から見て取れます。花卉をしっかり和開き「私が一番でしょう」と競うように描かれたひまわりや、ひまわりのもつ多様な表情を一つ一つ分配して描いたような作品もあります。ゴッホ作品から触発されたことをベースに自分なりの描き方を模索していったのでしょうか。指導者は、子どもたちに表現方法の多様性や西洋美術への理解や関心を抱かせようと本題材を設定したと考えます。

写真9は、中国画の手本教材といったような作品を活用した「模倣画」だと思われます。濃淡、ぼかしと



写真9 「中国画」の模倣画

いった技術を身に付けるための筆の扱い方や、遠近法の構図、伝統的題材といった絵画の知識や技能の習得を目的として取り組まれたものだと思います。子どもたちはこういった「模倣画」の活動を通して、中国の伝統的な絵画の知識や技能を習得していくのだと思われます。日

上海師範大学を訪問して

福井大学教職大学院 特命准教授 山野下 とよ子

1. はじめに

今回、教職大学院の訪問団11名の一人として上海師範大学や上海の高校、小学校などを訪問させていただいた。日本は前の週まで雪が降る寒い日々だったが、上海について2日目、3日目は20度以上になる暑い日だった。大学の校内の広い道路の両側はプラタナス並木で、あちこちに梅や白木蓮が咲き乱れ、枝垂れ柳が風にゆれていた。正門の裏側にたくさんの紫金草（シヨカッサイ）も咲いていて一足先に春を味わってきた。団長の森先生や手続きをくださった青山さん、通訳やいろいろなお世話をくださった劉先生や張さん、たくさんの方々のおかげでとても有意義な訪問ができた。皆様に感謝したい。

上海師範大学に行きたいと思ったのはいくつか目的があった。訪問団全体の目的である「上海師範大学における教師教育と教育実践研究の調査」と共に小学校も訪問するということだったので、「小学校の様子や授業」を見たいと思っていた。もう一つは「PISAにおいて、上海が2009年2012年とも数学的リテラ

本でも、中教審（H20.1）の答申における図画工作科の改訂の基本方針に、「我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する」といった文言が記されたこともあり、ここ数年は小学校でも日本の伝統的な作品を用いた題材も開発されています。しかし、それまでは伝統を受け継ぐための題材は、ほとんど見られませんでした。上海における生活空間の至るところで中国の伝統文化を感じることができるのは、自国の伝統文化に親しみそれらを継承していこうとする学習内容が小学校教育の段階から長年大切にされてきたからなのかもしれません。

5. おわりに

本稿では、小学校における美術教育といった狭義の視点から、上海の学校教育の特徴とそこに投影される日本の学校教育の課題について述べてみました。このような上海と日本との差異から見てくる特徴や課題は、学習指導要領（日本）と教学大綱（中国）に記されている教科の目標や内容の違い、あるいは学級担任制と教科担任制といった人的環境などが大きく影響していると思われることから、他教科にも通じるものがあるのではないかと思います。

今回の視察研修は、私にとって、「他国の学校教育を見て、自国の学校教育を知る」といったものになりました。制度や方法は違えども、曹校長先生が芸術教育に求めるものとして語られた「子どもたちの全人的な発達を促し、創造性を育む」は、両国に通じる願いでもあります。今後も、互いの教育実践を交流させ、それぞれの国の学校教育の向上に貢献し合える関係をつくっていきたいと思いました。

シー、読解力、科学的リテラシーのどれも1位となっているわけ」を探ってきたいと思った。

2. 印象的なことから

2日目に上海市楊浦高級中学（日本での高校）訪問、3日目に上海師範大学第一附属小学校訪問ができた。高校では校内の見学と高1の英語の授業を参観させてもらった。授業はもちろん全て英語で、前面にある大



きなスクリーンがタッチパネルになっていてどんどん進められていき、教師の問いかけに生徒たちが英語で答えていた。内容はノーベル賞の受賞者（パネルに写真も出て）についてで、生徒との問答から最後に「Why do you think young students are invited to the Nobel Prize Award Ceremony?」の問いがあって、生徒たちはグループディスカッションをして、それぞれのグループから多様な考えを出していた。日本の高1のレベルとはあまりにも違い、驚きだった。小学校からの英語教育の結果なのだろうか。一日目に空港へ迎えにきてくれた張さんの娘さんから小4の英語の教科書の中身を見せていただいたが、「The lion and the mouse」の物語があったりで、日本の中2ぐらいのレベルだったことも考え合わせると、ハイレベルの内容を学習しているのだと理解した。

3日目の附属小学校は芸術教育に力を入れているとので、広場や廊下にすばらしい絵などが掲示されていた。4年生の算数の授業を参観した。小数の位や大小比較の問題をスクリーンに写して、一問一答式に進められていた。一人の児童が間違った答えを言った時、別の数人が手を挙げた。教師がそのうちの一人を当て、正しい数値を言う場面もあった。教具を使うことや、グループで話し合うなどはなかった。基本的に一斉授業でなされているようだ。教科書を見せてもらう。次時の内容は、単位の換算をしないと比べられない具体的な事例から入り、生活の中で小数表示がされている物の絵がたくさんあった。日常の生活とのつながりが重視されていることが見て取れた。上海では小学校1年から教科担任制で、数学（算数）の先生は数学だけ、英語の先生は英語だけ教えるという仕組みになっているとのこと、授業研究は教科ごとの「教科研究組（教研組）」でなされていて、他教科の授業を参観することはほとんどないとのことだった。「教科の専門性が高いこと」をベストと考えられている。上海の子どもは一人っ子で親や祖父母の期待を一身に受け、生活指導上の問題などはあまりない。放課後学習塾に通う子どもも多く、各教科のいろいろな教師とうまく付き合っていくことが求められているとのことだった。

「OECDのPISAで上位のわけ」については上海大学本部や教育学院での意見交流会で聞くことができた。いくつかの要因を私見でまとめてみる。

- ・2002年からの教材とカリキュラムの改革で全ての学校のレベルアップ（均衡化）が強化されたこと。

上海師範大学等訪問記

福井大学教職大学院 非常勤講師 松井 富美恵

3月16日から4日間の日程で、福井大学教職大学院一行11名が上海師範大学等を訪問するため上海空港に降り立った。空港から約1時間、車窓からは林立するマンションと菜の花の黄色が美しく見え、暖かい春を思

- ・前にも述べたが、小学校からの教科担任制で教科ごとの「教研組」が学内（週2～3回、共同で授業準備）→区での教研組の研究交流→市での教研組の研究交流とつながっていて、それぞれ優秀な教師が指導する組織がしっかり確立されていて、授業研究などを頻繁に行っているとのこと。（教師の中で競争がある。力のない教師は辞めるらしい）
- ・PISAにおいて平均点が1位だけでなく、レベル1以下の割合が数学的リテラシーでは日本は11%に対して上海は4%、読解力も日本10%、上海3%と少ない。これについても、子どもたちの学習への熱心が強い面と「全ての子どものレベルを高める」を目標とされているからとのこと。

アクティブラーニングを取り入れるなどの学習観の転換はまだだが、今後やろうという意識は出てきていると話されていた。



3. 交流の大切さ

今回師範大学内で日本の愛媛大学へ留学するという2人の学生さんに会った。日本語で上手に話されていた。また日本人の学生さんにも会い、この師範大学に日本の20の大学から26名も中国語を学びに来ていると聞いた。若い頃日本に留学していた大学の先生方もたくさんおられ、日本語の達人な人が多いことに驚いた。中国語が話せない自分を恥ずかしいとも思ったが、これからの若い人々には、お互いの言葉を学ぶと同時にお互いの文化や歴史も学んで、相互理解、相互敬愛の精神を育ててほしいと思った。

わせた。しかし、遠方は案の定かすんでいる。少し不安がよぎった。周囲に溢れる漢字の羅列からは、意味が分かる言葉は思ったより少なかった。4日間ずっと大学教員でもあるという劉さんが付いて通訳してくださったの

で、とても心強く有難かった。

宿泊する大学構内にあるゲストハウスはとてもきれいで、ホテルと同じ使い方、とても安心して過ごせた。ゲストハウス周辺は、植物が豊富に植えられていて美しかった。桜？と思わせるような梅、桃、白木蓮、紫木蓮が満開、真っ赤な椿も咲いている。他パンジーや大根草なども咲いていて華やかだった。私は毎朝食前に、短い時間周辺を散歩した。近隣の住人だろうか、運動や体操をする人、ダンスをする集団、勉強している人など多数あり、中国らしい。構内を忙しそうに人々が行き交っていて通勤、通学路のようでもあり、市民に開放されている公園みたいでもあると思った。

さて、暑いくらい暖かく良い天気が続いた三日目、3月18日午前中に近くにある師範大学第一附属小学校を訪れた。大学からは徒歩で行ける場所にあり、小学校前の道路の反対側には私立のか幼稚園があった。ちょうど小学1年生くらいの体格に見える子どもたちが先生に引率されて歩いていた。楽しそうなので散歩だろうか。附属小学校の門を入ると、校長先生がにこやかに出迎えてくださった。すらすらとして若く見え正直驚いた。いったい何歳なのか、と思ったのは私だけではなかったようだ。もう一人の女性は誰だろう？入ってすぐの通路壁に、カラフルで素敵な子どもたちの絵が飾ってあり誰もが見入ってしまうように思えた。いろいろあったが、二年級と表示された何枚かの絵は、子どもらしく夢がありきれいで、ほんとに2年生が描いたの？と思った。時間をかけ丁寧に描かれていることが伺えた。通路を抜けると四角い広場の四方に小さい庭があった。校長先生から、日本の庭を参考にして四季を表現していると説明があった。ちょっと意外だ。図書室、4階の屋上、廊下、教室、グラウンドなどを見学できた。屋上に出ると、木製のかわいい二人乗りブランコが目に入る。テーブルやイスもある。しかもカラフルでかわいい印象。こんな場所日本にはないよ！と思ってしまう。保護者との相談もここで行うとの説明があった。えーっ！そうなの？同じ4階にサンルーフの明るいエリアがあり、意外にもダーツゲームができる場所があった。なんでも競技会ではトップクラスの優秀な学校らしい。いろいろな競技で入賞した児童の手形が掲示してあり、力を入れていることが分かる。廊下や階段の壁には児童の作品が飾ってあり、日本の学校とよく似た雰囲気だった。授業は、3年生の日本で言う図画工作と4年生の数学（算数ではなく教科書に数学と書いてあった）を見学した。40名近い制服姿の児童でぎっしりの教室の雰囲気は日本と大きな違いは感じられなかった。図画工作の授業では、一人一人がA4版の白い紙に「まつり」の題材で思い思いに下絵を描いていた。机の上にサインペンが置いてあった。私達が見ているからか、表情はにこやかで楽しそうに描いている。色をつければ、学校に入った通路壁に飾ってあったような絵になるのだろうかと思わせた。このような描き方がたまたまなのか、小学校の方針か、市あるいは中国全土のやり方かどうかは分からない。4年生の数学は、小数の勉強で、黒板半分ほどのプロジェクターに問題が出ている。一問一答で一斉授業。分かった子が挙

手し、当てられた子が答える。答えが間違っただけの子はそのまま立っていて他の子が答えたあと、もう一度間違っただけの子が正解を答えるようだ。分かるまで確認するのかと思ったが、担任独自のやり方かどうかはやはり分からなかった。見学した二つの授業とも女性の先生で、よく統制がとれていた。終了のベルの直後、校内放送に合わせて一定のコースで目や顔の体操が始まった。これはいい。さすが健康への意識が高い国だと思った。

見学後、会議室で懇談がもたれた。校長先生から英語で歓迎の言葉と学校の概要説明があった。多くのエクササイズがありアートにも力を入れていることが分かる。教育課程を知りたかったが、ホームページにあるとのこと。質疑応答の中で、附属小学校へ入学のための選抜試験はなく校区に住んでいることが条件であること、人数オーバーの場合より以前に住んでいる者が優先されるということ、福井のような附属校への選抜入学試験は賛成できず子どもらしく育てることが大切だという話などが印象に残った。また、福井とは違い小学校でも専科の先生が授業をし、研修、研究も教科の先生同士で行うなど、高い専門知識が求められ教科の専門性をとても重視する教育観を感じた。教科の専門性重視の考え方は、18日午後の師範大学教育学院との会談でも同様な説明があった。



また校長はいつでも授業を見に行ける立場とのことだった。校長は見に行くのも仕事のうちになっているのだろうか。見に行く主たる目的は、子どもか教員か両方だろうか…。そういえば廊下の壁にプロジェクター？がいくつも取付けられていて児童向けの情報が流せるようになっていたのを思い出した。学校からの連絡事項や校長先生のお話などがいつでも見られるとのこと驚いた。便利ではある。実際休み時間に児童が見に来ていた。情報機器に早くから慣れる環境があるのを感じた。教科の壁を取り払って協働することについては、今その考えはないということだった。教師同士の協働について校長先生は多少興味を示したように見えた。印象深かったのは、子の心のケアについて、「子どもはいつも正しい、問題があるとしたら教師や親にある」「不登校などはあまりないが、心の弱い子どもがいてそういう子は成績が良い。校長として分かるように努めている」というお話だが詳細は分からない。特別支援学級があるかどうか質問しなかったので不明だが、同日午後の日程で

の話の合わせると無いように思う。その他師範大学との交流や中学校との連携などはまだまだであり、福井大学教職大学院の取組を支持する旨の発言もあり、校長先生の前向きな姿勢を感じた。また、上海の学校は区教育委員会との関係が強いことを意識させられた。今回の訪問では、他教科の教師間をはじめ学校間や大学など他機関との連携、協働はあまり行われていない感じが感じられた。

最後に、グラウンドで、といっても土ではないが、体育の授業を見学した。都会の中での綺麗なグラウンドで、福井のとは随分違う。体育館はないようで、高学年と思われる3つのクラスの児童達が分散して使用していた。それぞれ一斉に、跳躍や走り込みなどの運動をしているところだった。子どもたちの表情は明るく生き生きと取り組んでいたのが良かった。毎日体育があるそうで、やはり体作りにはとても力を入れていることが分かる。良い天気の日に見学できて良かったが雨天ではどうするのか、と思いながら記念写真を撮って学校を後にした。

主として小学校訪問について感想を書いてみた。

ところで、今回良かったこと。それは訪問した大学も各学校でも先生方はとても教育熱心であり、子どもたちはみな学習に真剣に取り組み、元気で笑顔が素敵だったこと。学校が私達外国人に開かれていたこと。諸外国へ留学生を送っていること。マスクをせずに済んだこと。きりがないのでこれくらいにしよう。今回気になったこと。それは道路上にでも痰を吐く大人がいること。他人が近くにいっても学生がゴミを端の方などに捨てるのを見たこと。一応ゴミ箱が設置されているのに。朝食に脱脂粉乳？が出たのにコーヒーが(出)なかったこと。周囲を見渡してもコーヒーの文字が見あたらなかったのはプチショックだった。福井から持って行ったのは正解。生野菜を食べなかったこと。帰りの飛行機の出発遅れについて説明が無かったこと。きりがないのでこれくらいにしよう。

私にとって上海師範大学訪問は、公私ともに収穫が多く有意義な旅で、参加できて良かったと思う。

上海の学校と先生と子どもたち

福井大学教職大学院 非常勤講師 中川 美津恵

3月中旬、上海師範大学視察という機会を戴いた。森透団長のもと、総勢11名が本学と提携する大学はじめ関係の学校を訪れ、中国の教育の一端に触れることができたのは幸せであった。目的は「上海師範大学における教師教育と教育実践研究の調査研究一附属学校の実践と教育委員会との連携の調査研究も含めて」である。13億の人口を抱え、近年めざましい経済的成長を遂げる大国、中国。その中でも、上海市の勢いは1、2を争うという。確かに活気があった。林立する高層ビル、次々と建設中の建物、浦東国際空港を離発着する飛行機や高速道路を走る車の多さ、その一方で早朝から桂林公園や大学グラウンドで太極拳やランニングで鍛錬する老若男女のエネルギー。構内は大学人だけでなく市民に開放され、人々は春の草木を愛でながら散歩したり、幼児を遊ばせたりと恩恵を享受していた。公道にゴミを捨てたり唾を吐く人に閉口する一方で、こちらが腰を下ろすまでは座ろうとしない律儀な人に恐縮した。私たちが訪問しお話しした関係の方々、さすが儒教の国の人であった。孔孟の教えが浸透し、礼儀正しく誠実な対応で、私は実に気持ちよく滞在の日々を送った。

訪問校のひとつである上海師範大学第一附属小学校の曹校長はどうみても30代に見えたが、ご本人は学校経営に年齢は関係ないと明言された。授業の合間の目の体操、休み時間のゲーム感覚IT機器の活用、都会育ちの児童のための季節の草花栽培、ユニフォームの導入は保護者負担になるので無理がないよう一学級ずつ取り入れ、



その成果を徐々に認めさせ普及を図ったりするなど、その手腕は確かなものに映った。何を問われても躊躇せず返答する校長はフットワークも軽く、自信に満ちていた。日本の多くの附属校と異なり試験による選抜でなく、近隣に住んでいることが入学の条件という。ただ上海という中国最大の商工業都市に不動産を入手することの難しさ、経済力の有無が実際の子どもたちの教育を左右しているのは事実である。校長は公立の学校だから公平、平等でありエリート校ではないと力説されたが、第一附属小学校に通える児童は一部の恵まれた子どもたちであろう。算数と図画の一斉授業を参観したが、図画は皆が黙々と同じような図柄で描画しており、個性を重視する日本とは異なるように見えたが、与えられた課題に拠るのかもしれない。未来の自動車を描いた子どもたちの絵は自

由な発想が感じられた。算数は空欄の数値を全員で考え、解いた子が挙手、発表し、それを皆で吟味するというやり方。PISA型学力でトップクラスになった上海の教育現場からそのヒントを見出したかったが、PISAについては研究していないとの回答。また、探究的なグループ学習、協働学習についてはあまり考えていないようで、それより教科担任制を取るため、教師の専門知識のレベルの高さを重視する姿勢が印象的であった。優秀な曹校長は経営手腕を買われての抜擢だろうが、外国からの視察団に対して流暢な英語で説明される姿は若きリーダー像を具現しており、実に格好良かった。

二校目の訪問校、上海市楊浦高級中学（「高級中学」は日本の高校。生徒数1200人。市の重点校。学費は他の普通高校より高額とか）では英語の授業を参観した。小学校1年から英語教育を取り入れている上海。しかも市内で有数の進学校とあってレベルは高く、「ノーベル賞授賞式になぜ若い人が招かれたのか」の課題に対して、生徒からは次々と新しい語彙が吐き出され、驚嘆するばかりであったが、向校長は英語の応用力は韓国の学生と比べると低いと話され、求める水準の高さに圧倒された。教室から英語以外の言葉は全く発されず聴こえず、徹底した語学学習に、参観する私も随分緊張した時間を共有した。

向校長は卒業後、世界に貢献する人になってほしいの思いを式や集会で述べられると言う。北京大学や精華大学はじめ国内の一流大学や外国の大学に進路を求める卒業生。上海では高校教師は修士卒が必要だということだが、教師は精進して専門性に磨きをかけているのだろう。部活動は週1回午後行なわれるだけで、日本のように部活動に青春を懸ける生徒も、指導に情熱を傾ける教師の姿も見られないようだった。

語学力に関しては中国人学生の力には驚かされた。出会ったのは近いうちに日本に留学するという一人の学生。まだ1年ほどしか日本語を学んでいないと言うが、きれいな日本語を操り、意思疎通は充分で、敬語の使い方も



見事であった。もう一人の日本語学科で学ぶ学生の日本語はさらに美しく、洗練されていた。人口減で国力の低下が危惧される日本。次世代こそ真の国際人になって外へ踏み出す必要がある。英語、中国語、韓国語、他のアジアや欧州の言語を身に付けていかねばならないことを痛切に感じた。

そして、本部の師範大学訪問。数理学院、本部、教育学院では責任者の方々とお話し、意気込みに感じ入った。上海市の教師や管理職の70%は上海師範大学から輩出されるとあって、大学の各部署では教師教育のための研修プログラムが工夫されており、数理学院でもパソコンを使った画像処理、音響技術など演習が行なわれていた。教育のIT化が進む中国ではITスキルは教員が当然身に付けておくべき能力で、日本でもいろいろ試みられているが、予算措置の確保が鍵となる。教育学院では日本に留学され金沢大学で学位を取られた胡副院長と直接日本語でお話できた。師範大学での現職教師教育は福井大学と似通っており、勤務したまま研修でき、今後双方からより良いものを模索し続け、優れた研修システムの構築が図られたらと思う。

最後に、今回の視察が成功したのは通訳の劉先生の能力の高さと人柄の良さに拠るところが大きい。感謝したい。

平成25年度

学位記伝達式が 終了しました

教職大学院 講師 笹原 未来



2014年3月24日、コラボレーションホールにて平成25年度学位記伝達式を執り行ないました。平成25年度はスクールリーダー養成コース15名、教職専門開発コース14名、合計29名の院生

が教職大学院を修了しました。学位記伝達式では在校生、スタッフらが見守る中、研究科長より修了生一人ひとりへ学位記が授与されました。



学位記伝達式の後は、再出発に向けたカンファレンスとして最終のカンファレンスが行なわれました。毎月行なわれる月間カンファレンスと同様に、スクールリーダー養成コースの院生と教職専門性開発コースの院生、スタッフがテーブルを囲み、小グループで2年間の振り返りを行ないました。過去を振り返ることを通して未来を描く、そのことを教職大学院においては積み重ねてきたわけですが、こ

の日もまた、修了生のみなさんは教職大学院での2年間の振り返ると同時に、「来年度は…」と新たな展望を語っておられました。また、1年目を終えようとしている院生は修了生の話に耳を傾け、自身の姿そこに重ね合わせながら次年度の展望を描いているようでした。

教職大学院は修了することになりますが、それぞれの実践は終わることなく続いていくこととなります。修了された院生のみなさんの今後のご活躍を心よりご期待申し上げます。

また、これまで教職大学院を支えてくださっていた渡邊元爾先生、佐分利豊先生が平成25年度をもってご退職されることとなりました。さらに、山口真希先生のご転出、濱口由美先生の兼任終了と、教職大学院を支えるスタッフもまた大きく変化することとなりました。平成26年度には新たなスタッフ、院生を迎え、教職大学院もまた新たな一歩を踏み出すこととなります。平成26年度も新しい時代の教育、教師教育の実現に向けて、絶え間ない実践と省察を積み重ねていきたいと思っております。

平成26年度

開講式が 開催されました

教職大学院 特命助教 半原 芳子



去る4月6日(日)平成26年度の開講式がコラボレーションホールにて行われました。今年度は教職専門性開発コースに8名、スクールリーダー養成コースに18名および研究生1名が入学しました。また、新しいスタッフが9名加わり、開設7年目を迎える福井大学教職大学院は一層大きな環となり新しいスタートを切りました。

開講式では、中田隆二研究科長、柳澤昌一専攻長の挨拶に続きオリエンテーションが行われました。院生は研究科長と専攻長からの激励の言葉に熱心に耳を傾け、緊張した面持ちながらもこれから始まる教職大学院での学びへの期待に胸を膨らませている様子でした。オリエンテーションでは年間計画や合同カンファレンス、各学校の担当教員、履修登録の説明等が行われ、最後に全体の記念写真撮影と分科会が行われました。分科会ではM1とM2が小

グループとなり、今年度の展望の共有および今後の連携に関わる日程調整等を行ないました。限られた時間ではありましたが、4月の合同カンファレンスへとつながる充実した開講式となりました。

満開の桜に祝福され入学された院生のみなさん、これからどうぞよろしくお祈りいたします。



Staff 紹介



宮下 哲

Satoshi Miyashita

過去が咲いている今
未来の蕾で一杯な今
春・・・物事が締めくくりと始まり
を繰り返しながら、少しずつ
つ前に進む時季を迎えると、
陶芸家、河井寛次郎の詩を思

い出します。うれしかったことや楽しかったことはもちろん、そうでないことも、すべてが今ある私の糧となっている・・・どの過去も、今ある私にとって、なくてはならないものであり、いただくご縁の中で「今」「此処」を精一杯に生きる先に、未来のつぼみが養われていく・・・このことを胸に、この花を愛でようと思います。

長野県の中学校教諭と教育事務所指導主事として、24年間の教職を勤めて参りました。担当する数学の授業づくりをはじめ、学級経営に生徒指導、部活動の運営や校内研究の推進、地域や保護者との連携、小中連携・・・などいつも四苦八苦で取り組んできましたが、そんな私の姿を映し、私の思い込みをほぐし、行く道を照らしてくれたのは、子どもをはじめとする他者とのご縁でした。

例えば、子どもの自主的・主体的な学びを願って授業を構想し、指導のあり方を省察して支援の方向や方法を明らかにする努力をしてきた「つもり」でいた私が、

「その努力は結局のところ『教科の指導内容を教えるために生徒の動きをどう用いるか』ということではなかったか」と問うようになるきっかけを与えてくれたのは生徒でした。また、「もの・ひと・ことと関わって問いをもち、学ぶ対象や追究方法を見出して、探究する楽しさ」や、「共に学ぶ友と分かり合う喜び、その喜びを言葉に練り上げる言語活動の奥深さ」の具体的な姿を示し、教材研究や授業づくりにかかわる私の取組の変容を促したのも、子どもであり共に歩んでくれた周囲の人々でした。

かつて「教師の主体性とか優しさとは、自分が教えたことを目の前の子どもの姿の中に読み解いて位置付けることだ」と言われたことがあります。自分の実践が、「誰のための、何のためのものかを問い続けているか」と語りかけるこの言葉の答えを探すには、多様な他者とのご縁の中で「今」「此処」を精一杯に生き、「子ども」の姿を根拠に、自分の取組を再構成していくことが欠かせないと思います。私も、これまでの実践を大事にしつつ、思い込みを排除し、「今」から、「此処」福井の地から、「子ども」の具体的な学びを読み解き位置付ける教師のはたらきを探ることから、研究と実践を積み重ねます。よろしく願いいたします。



小林 和雄

Kazuo Kobayashi

今年度、大学院教育学研究科准教授として着任した小林和雄です。昨年度まで、茨城県の小中学校で教諭をしながら、筑波大学大学院で、理科教育学の研究をしていました。

私が初めて福井大学に来たのは2008年に開催された日本理科教育学会全国大会でした。歴史を感じる趣のある城下町で、海にも山にも近く、温泉もありながら、静かですてきな町だなど思いました。そのとき食べたソースカツ丼がととても美味しくて、学会中同じ食堂に二度三度と足を運んで舌鼓を打ったことを覚えています。

また、大学と授業及び学校改革を進める教育現場とが日常的に交流し、「理論と実践の往還」を具現化している様子が活き活きと描かれた福井大学教育地域科学部附属中学校研究会著「中学校を創る 探究するコミュニティへ」や「学びを拓く《探究するコミュニティ》授業のプロセスとデザイン 数学・理科・技術編」とい

う本と出会い、「いつかは福井大学へ」と、あこがれを抱くようになりました。この福井大学で、多くのスタッフや学生、福井県内外の学校の先生方がつくる学びのコミュニティの一員として、質の高いオーセンティックな学びのある授業作りについて学び続けることができること、本当に嬉しいです。さらに、教職大学院が未だ発展途上で完成されておらず、課題が山積しており、その解決のために創生期のスタッフとして参加できることも喜びです。

専門の理科教育学以外は何も分からないので、みなさんからいろいろ学びたいです。今主に研究しているのは、理科学習における仮説設定能力の育成についてです。未知の問題を解決したり、科学的な概念への深い理解のための探究の成否の鍵を握るのは仮説設定局面におけるファシリテーターとしての教師の支援の善し悪しに掛かっています。そのためには、道に迷っている人を電話で目的地に導くがごとく、今何が見えるのか、次に何をすれば良いのかを示すことが求められます。通常の

授業、所謂必修科目の中で子どもがもともと持っている考えを生かし、科学的な概念の深い理解につながるような探究的な学習は、教師の実践の積み重ねによる経験や勘のみで意図的、計画的に展開することは難しく、理科

教育学や関連諸分野の研究から得られた知見が必要で、理科の授業作りの経験から得られた知見で、お手伝いできたら幸いです。私も頑張りますので、どうぞよろしくお願いたします



風間 寛司

Hiroshi Kazama

今年度、大学院教育学研究科教職開発専攻准教授として着任しました。どうぞよろしくお願いたします。

私はこれまで新潟県で育ち、新潟県の国公立中学校の数学教師として生きてきました。私と福井とのつながりはほとんどありませんので、二つのエピソードから考えたことを紹介させていただきます。

一つは、私が新潟大学の附属長岡中に勤務した年のことです。花壇で稲を栽培している教師がいました。長岡の農業試験場（現 新潟県農業総合研究所）から稲の種子を頂いてきて授業化していたのです。この農業試験場で交配された種子は福井農事改良実験場で育成され、越南17号が誕生しました。昭和の初めまで「新潟の米はまずい」と言われていましたが、今は正反対です。命名には、越前と越後の越（こし）の字が使われています。「木枯らしが 吹けば色なき 越の国 せめて光れや 稲コシヒカリ」。「越南17号（コシヒカリ）の欠点は、栽培工夫によって克服される」との判断を実践した新潟県の稲作農家の努力は、私たちに理論と実践の往還による協働と、現場の実践の積み重ねが教育を変えていくものであることに気付かせてくれます。

次は、福井の美しさを実感した映画「サクラサク」です。福井の強い志と地道な協働が10年かかって結実したとのこと。主人公の父は旅の中で自分の原風景を確認します。「心に咲く花は、季節を選ばない」という歌詞とつながります。主人公はその旅を通じて自分を省察し、家族との絆を紡ぎ直していきます。その契機は父が「その人間をほめてやるには、その人をしっかりみてやらなければいけない。」と諭す場面にあったと思います。真に私たち教師の子ども観です。優れた教師は、子どものよさを見付け、適切な場面で返していきます。それは、「子どもは、よりよく在りたいと願う存在」だからです。また、私たち教師一人一人にも「教育の原風景」があります。日々の子どものやりとりのその一瞬一瞬の積み重ねと教師のコミュニティを通じて紡がれたものです。その根幹にあるものは何でしょうか。私は、豊かな原風景をもつインナーメンターが力量形成の鍵と考えて、「私」を対象に教師としての成長を研究してきました。その風景の一つには、恩師が教室の後ろに座って私の授業をみてくださっているまなざしと言葉があります。つまり、授業における省察的実践家としての教師の力量は、「行為しながらの省察(reflection in action)」による意思決定が極めて大きいと思うのです。

皆様と協働して実践を紐解き、互恵的な省察ができることを楽しみにしております。

院 生 紹 介



藤井 真衣 ふじい まい

はじめまして。今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学した藤井真衣です。教科は国語で、啓新高等学校でインターンをさせていた

だくことになりました。学部の教育実習が公立中学校だったので、初の高校、初の私立学校です。気持ちを新たに取り組んでいきたいと思っています。

大学では言語学という専攻に所属していました。特に言葉の表現効果に興味があり、卒論では「擬音語の文字の色や字体を変化させると、文字を見て連想する音にどのような違いが表れるか」というテーマで調

べました。言葉の伝え方を一工夫することで受け手に無意識に何かしらの影響を与えられることが分かり大変面白く感じました。

私たちが普段読む文章や台詞の中にも、受け手に無意識に効果を与える表現がたくさんあります。例えば小説で、登場人物の性別や出身地が書かれていなくても「～なんだぜ」なら男性、「～ながいちゃ」なら富山出身（私は富山県出身です）などのように台詞で判断できます。また説明文の最初に「～だろうか」という問題提起が書いてあると、それ以降の文の流れがなんとなく想像できます。これらの表現は、慣れてしまえば受け手にとって当然のものとして無意識に受け取られま

す。しかし、慣れていなかったりその表現を知らなかったりする人にとっては訳の分からなくなるポイントにもなります。

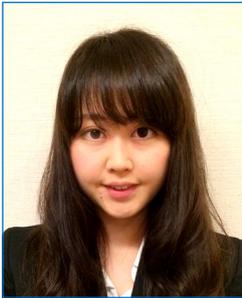
そのことを一番よく感じたのは、昨年取り組んでいた中学校特別支援学級での学習支援においてでした。国語のワークを解く生徒たちは登場人物の人数や季節が分かりませんでした。それに対して私はどう教えたらいいのか分かりませんでした。登場人物の人数や季節を無意識に理解していたため、どうやったら理解できるのか説明できなかったのです。

この経験から私は、「私たちはなぜ表現を理解できるのか」を一つ一つ明らかにすることが生徒の「なるほど」という声につながるのではないかと考えました。何

をどうすればこのテーマを調べられるのかは全く分かりませんが、インターンを通して少しずつ解決の足掛かりを得たいと思います。

また国語以外でも、なぜ生徒を理解できるのか、なぜ指示が通るのか、なぜ生徒が成長したのか、何が生徒の変化につながるのかなど、教職に関する疑問は山程あります。それらの多くは無意識か、慣れの問題なのかもしれませんが、あえてそう言った言葉を使わずに突き詰めて「なぜ」を考えてみたいと思います。

最後に、あまり器用でないので多くの方にご迷惑をかけると思いますが、立ち止まった分だけ考えを重ね、答えを出し続けたいと思います。よろしくお願いたします。



吉田 智保 よしだ ちほ

はじめまして！今年度、教職専門性開発コースに入学した吉田智保です。3月まで京都女子大学に在学していました。4月より、中藤小学校の方で長期インターンシップをさせていただくことになりました。専門教科は英語です。

大学在学中は、教育実習はもちろんのこと、私立・公立の小学校・高校に何度か訪問させていただく機会がありました。下は小学校1年生から、上は高校3年生まで幅広い児童・生徒と関わってきました。短い期間の中でも、子どもたちは毎日変化し続けるので、その度に学ばされることがたくさんありました。しかし、それと同時に子どもたちの変化に伴い、臨機応変に対応することのできない自分がいました。特に高校における授業は、大学で全く実践的な活動を行っていなかったため、高校時代に受けた授業の断片的な記憶だけを頼りにその場を乗り切った経験があります。この時私は、教壇に立つためにもっと実践的な経験を自分のものにし、長期的なスパンで子どもたちの変化を見ていきたいと強く思いました。これにより、私は福井大学教職大学院を志望するに至ったのです。

また、これまで私は「教師の自主研修の必要性」についても多方面から研究を行ってきました。これは、教

師が多様な教育問題や課題に直面した時に、適切に対応できる能力を向上させる必要があります。それは自主研修によって養うことができるという考えを根底に持っているものです。自主研修を行うということは、つまり「学び続ける教員」を確立させるということです。この研究から私は「学び続ける教員」でいることの重要性を学びました。教育問題だけではなく、今後は時代の変化に沿ったICT活用などの新たな試みもますます増えると思います。しかし、どんな課題に直面しようとも、その解決に導いてくれるのは自分でしかなく、自主性を持って探求をし、課題解決のための努力を行うことが、直接的に子どもたちへと影響してくると考えています。大学で行ったこの研究と考察を基に、「学び続ける教員像」を確立するため、長期インターンシップでは子どもたちから学ぶだけでなく、自ら新たな学びの構築に対して貪欲でありたいと思っています。

今後私は日々の子どものふれあいの中で、自分なりに課題を発見し、解決するために精一杯努力する次第です。加えて、様々な引き出しを持った人間味のある教師になれるよう、この2年間で学業以外にも新しいことにたくさん挑戦していこうと考えています。分からないことばかりなのでご迷惑おかけすると思いますが、2年間よろしくお願致します。



田中 紗衣里 たなか さえり

教職専門性開発コースに入学した田中紗衣里です。大学では日常生活で生かせることを広く学びたいと思い、奈良女子大学の生活環境学部に入學し、中高の家庭科の免許を取得しました。部活動や実習などを通して、人とのつながりの大切

さを学びました。そして、自分の学んだことを生かしながら、人と直接関わって働く仕事を考えた結果、教員を目指そうと思うようになりました。

教員をするならば、生まれ育った福井でやりたいという思いがありました。しかし、私は福井の大学出身ではない上に学部が教育学部ではなかったこともあり、福井県の学校や教員として働くことに関する情報量が、県

内の大学に進学した友人たちと比べて少ないことに不安を感じていました。教育実習は福井市内の中学校で行わせていただき、とても良い環境でたくさんのことを学べたと思っていますが、3週間という短い期間だったため、教科の指導や学校のことについて、もっと知識や経験を増やさなければいけないと感じました。このような自信のない状態で教員になっても、生徒たちを指導できそうにないと思っていた時に、福井大学の教職大学院のことを知りました。長期のインターンシップができるのなら自分が学びたいことを十分に学べ、自信もつくのではないかと思います、進学を決意しました。

4月からは、附属中学校でインターンシップをさせていただくことになりました。附属中学校は生徒が主体となって活動することが多いという特徴があり、私が経験してきた公立中学校での学習スタイルとは異なる部分もあるようです。自分の経験にはない、新しいことを学

んでいくチャンスだと思うので、先生方や生徒たち、先輩方から多くのことを吸収していきたいです。また、私は中・高・大とバレーボール部に所属し、活動してきたことで、より充実した学校生活になったと感じています。その経験を生かして、生徒たちの毎日がより良いものになるよう、部活動の指導を通して手助けしていけたら、と考えています。

私は、生徒たちが自ら力を伸ばしていけるような環境作りのできる教育者を目指したいと思っています。そのために教科の勉強をすることももちろんですが、学校のシステム、運営についてももっと知識を深めたいです。また、カンファレンス等で様々な考え方に触れて視野を広げ、自分の理想に近づけるよう努力していきたいと思っています。2年間よろしくお祈りします。



高田 侑来 たかだ ゆき

はじめまして。教職大学院教職専門性開発コースに入学しました、高田侑来です。生まれも育ちも福井県ですが、大学は静岡大学に在籍し4年間国語教育について学んできました。この

4月より、至民中学校にて長期インターンシップをさせていただいております。インターン初日から職員会議等に参加し、学校運営について間近で学んでいます。生徒のため、学校のためにと動く先生方には感心させられるのと同時に、早く私も至民中学校教職員の一人として、微力ながら力になりたいとの思いを強くしています。その一方で実はこの文書を書いている今、生徒とはまだ会っていません。もうすぐやってくる入学式、始業式にて初めて生徒たちと関わりを持つこととなります。不安がないと言えば嘘になりますが、新しい出会いに感謝の気持ちを持って笑顔で来る日を迎えられるよう、意気込んでいる次第です。

さて今回は自己紹介ということですので、私が教職を目指すことになったきっかけを少しお話させていただきます。幼いころから教師という仕事に憧れを抱いていましたが、その思いを強くしたきっかけは部活動です。中学生のころ陸上競技部に入部した私は、特に精

神面が弱い生徒でした。自他ともに認めるガラスのハートの持ち主で、大事な大会に限って本来の力を発揮できないという悔しい経験を幾度もしていました。そんな私に顧問の先生は、走力よりもまずは精神面を鍛えることを優先して指導してくれました。時には厳しい言葉を浴びたこともありましたが、基本は褒めて伸ばすという方法を取って頂いたと思っております。その結果、徐々に自分に自信がもてるようになっていったのと同時に成績も残せるようになり、集大成の年には満足できる結果を残して卒業することができました。

結果を残すことができたことはもちろん嬉しかったのですが、6年間のなかで様々な先生方と出会い、その指導をきっかけに私は成長し変わることができた、その経験と自信の方が私の中に強く残ったのでした。決して派手な仕事ではないですが、生徒の成長をサポートしその過程を間近で見守るという役割とそのやりがい気づいてからは、教職に就きたいとの思いを温め続けました。そしてその結果、私は今ここにいます。

これからの2年間は、多くの人と出会うことになるでしょう。「出会いは成長の種」というように、私自身、そして私と出会ってくれた人と共に成長していけたらと思っています。どうぞよろしくお祈りいたします。



田村 朋久 たむら ともひさ

はじめまして、今年度から福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学しました田村朋久です。4月より啓新高等学校で週3日間のインターンシップをさせていただ

くことになりました。専門教科は理科、特に生物分野を中心に担当させていただく予定です。

啓新高等学校は普通科だけでも特進クラス、進学クラス、普通クラスと分かれているほか、ファッションデザインクラスや調理クラス、福祉クラス、商業クラ

スなど、とにかく多種多様な教育の場があり、それに伴って多種多様な生徒が生活をしています。私自身は高校時分ではまだ将来の展望などはほぼ何も考えておらず、生物系の職に就けたらいいな、という程度にしただけを考えておらず、ある意味では私よりもよっぽど大人な考えを持っていると、思えます。そのような生徒たちとたくさん話し生徒のことを知る、また自分のことを知ってもらうことによってお互いが大きく成長できるのではないかと考えています。

私が教職大学院に入学したきっかけは、まず私の出身大学が農学系の大学、さらに高等学校免許のみ修得可能な学校ということもあり、たった2週間の教育実習期間でしか学校教育の場で子どもたちと接することが出来ず、その期間中に担当させていただいた授業も授業計画どおりに進行することで頭がいっぱいになってしまい、生徒の顔を見ながら授業を行おうと意気込んでいた分、自分の技術力の低さにショックを受けたことです。この件から、教育実践的な能力がまだまだ足りていないと感じた為、インターンシップという制度を採っており、実際に教育の現場に赴いて勉強するこ

とが出来た本大学院を志望しました。

次に、私が教職員を目指したきっかけとしては、大学生活中のサークル活動がきっかけでした。私はキッズボランティアサークルという石川県内の小学生から高校生を集め、春・夏の年2回キャンプをするというサークルに所属していたのですが、その活動の中で、子どもたちと接することや新たな物事を教えること、自然の中の様々なことを教えることの喜びや楽しさを感じたため、教職員を志すようになりました。

教職大学院の生活の中で大学院の先生方や先輩方、同期の皆様方、高校のメンターの先生や他の先生、そして生徒たちと一緒にわからないこと、気になったこと、何気ない小さなことをたくさん話し、お互いを知り合い、お互いがお互いの糧となるような生活を送ってゆき、教師としての仕事を学び、子どもたちにとって小さくても確実なステップになれるように頑張りたいと考えています。どうぞ、これからよろしくお祈りします。



高橋 聡志 たかはし さとし

こんにちは。教職大学院教職専門性開発コースに入学しました高橋聡志です。福井大学の教育実践科学コース出身です。インターンシップは中藤小学校で

させていただくことになりました。

私が教師という仕事に興味をもったきっかけは中学校の担任の先生でした。毎日学級通信を出し、連絡帳や交換ノートにもコメントをつけていただいて、「近くで見守ってくれている」という安心感をもって学校生活を送ることができたのが印象に残っています。また、いつでも相談できる雰囲気をつくってくださり、時には先生の方から「大丈夫か？」と声をかけてくださることもありました。今振り返ると、私たちとの距離を考えて動いてくださったのだと思います。そんな私が学部3年の時に行った1ヶ月間の教育実習では、子どもたちとの距離感がつかめないまま終わってしまいました。私は「先生」というつもりで現場に入ったのですが、子どもたちには「お兄さん」というイメージでとらえられてしまい、「馴れ合い」が生じてしまいました。担任の先生の授業では静かなのに、私が行う授業では静かにならない、など「馴れ合い」が生まれたことによって苦労した点がたくさんありました。私は心のどこかで子ども達と仲良くすることが子どもを理解することにつながるのだと思っていたのかもしれませんが、私が影響を受けた先生はそうのようにしていただろうかと考えると違うことに気がつきました。授業や日頃の生活の中で子どもたちの特徴や個性を捉え、連絡帳や交換ノートといったツールを利用してコミュニケーションをとる。決して「馴れ合い」ではなく子どもひとりひとりをしっかりと

理解した上で接することが重要なのだと感じました。

1ヶ月の教育実習では、そうしたひとりひとりの子どもへの理解を深めるのに短すぎたような印象をもちました。教職大学院では長期インターンということで子どもたちを見る時間が増えます。ひとりひとりに合った指導をすることは、時間的にも自分自身の技術的にも難しいことではあると思います。しかし、せつかくの長期インターンシップなので、子どもを理解する手立てや、その手立てを普段の生活や授業にどう活かすかということを感じて実践していきたいと思っています。

これから始まるインターンシップでは、楽しいことも辛いこともたくさんあると思います。そうした経験が自分の糧となるように、常に目標をもって過ごしていきたいです。まだまだ学校現場について分からないことだらけだと思うので、たくさんの方を先生や先輩方に尋ね、教えてもらいながら自分を高めていきたいと思っています。これから精一杯頑張っていきますので、よろしくお祈りします。





北川 優佳 きたがわ ゆか

高志高校、大阪教育大学を卒業し、この春から福井大学教職大学院教職開発専攻教職専門性開発コースに入学した北川優佳と申します。大学では新課程の学科に進んだために教職関連の授業は少なく、また学校現場に触れる機会はほとんどありませんでした。教育実習は附属高校で4週間させていただきましたが、公立中学志望にも関わらず中学での実習経験がなく、実践力の低いままで一先生として現場に出ることに大きな不安を感じていました。そんな時、母から薦められて教職大学院について知り、実践力をつけながらもきちんと振り返り、意見交換をする中で学び合える教職大学院への進学を決意しました。

今年度からは週3日間、坂井市立丸岡南中学校でインターンをさせていただくことになりました。丸岡中学校が二校化した時に残った方の三年生だったということもあり、インターンを地元丸岡でさせていただけることに喜びを感じています。小学生の頃から漠然と先生になりたいと思い続けてきましたが、そう考えていたのは小学校・中学校・高校と、ひとえに先生方に恵まれていたからだと思います。教科の授業はもちろんですが、部活動

や掃除の時間など、授業以外のふとした瞬間に学んだことも印象強く覚えています。生徒にとって分かりやすい授業作りは必要不可欠なので、授業力は鍛えていかなければなりません、教科教育以外での関わりも大切にしていきたいと思います。また、専門科目である理科だけでなく、ソフトテニス部も副顧問として担当させていただけることになりました。小学生から選手として続けてきたソフトテニスを教える側に立てるという貴重な機会を活かし、教科教育だけでなく部活動を通して生徒とより深く関わっていただけたらと思っています。理科にしても部活動にしても、課題を見つけ、それと向き合って考え、その解決に向けて試行錯誤していくという点において非常に似ていると思っており、そのプロセスを積み重ねていくことが成長につながると自分自身の経験から感じてきました。インターンでも、これらの特性を活かして、少しでも生徒の成長を支えながら、自分自身も高めていただけたらと思っています。丸岡南中学校のインターン生としてまだ日は浅く、右も左も分からない状態ですが、常に学び続ける姿勢を忘れずに、積極的かつ真摯に生徒や自分自身と向き合っていくことで、有意義なインターンにしていきます。精一杯精進しますので、よろしくお願い致します。



田村 佳子 たむら よしこ

この度、教職専門性開発コースに入学しました、田村佳子と申します。出身は石川県、関東の音楽大学でピアノを専攻しておりました。大学卒業後、石川県へ戻り、演奏活動をしながら民間企業に5年間、高校で常勤講師として5年間、勤めました。教育現場を一度離れ、学び直したいと思った理由は、音楽の授業を通して、子供たちにもっと伝えられる「何か」があるのではないかと、平日頃より考えていたからです。講師をしながらでも学べる、そのほうがいいはずだと、ずっと思いながらやってきました。しかし、目の前にいる生徒たちをどうしても優先してしまうこと、そして日々の仕事に追われる状態での両立は厳しいと判断し、教員採用試験のために一旦、現場を離れる覚悟を決めました。教職大学院の存在を知ったのは、その数ヶ月も後のことです。12月末と遅かったため、受験準備の期間もほとんどないまま最終募集に飛び込みましたが、ただ採用試験のためだけに勉強するよりも、教師としての力を少しでも付けたい、そして実践に基づいての振り返りを大切にしたいという思いから受験し、入学することができました。

私は正直、教師を目指していたわけでもなく、逆に教育実習を終えたとき、先生という職業には就けないと思っていました。それがご縁あって、高校の常勤講師の

お話をいただき、迷いに迷いましたがやってみようと思前向きに考え、気付いたら5年もの歳月が過ぎていました。1年目は、様子を見ながらの講師生活でしたが、芸術コースのある高校なので、主に音楽専門の指導が中心で、大学で学んだことを十分に生かすことができました。また、部活動では合唱部を担当し、初めての合唱の指導に戸惑いながらも、全国総合文化祭には2度の出場、コンクールでも3度の県代表、そのほか地域の病院・施設への演奏も活発に行い、様々な経験をさせていただきました。

最後の2年間、普通科1年生の選択音楽の授業を持ち、ここで大きな壁にぶつかりました。歌わず、やる気のない生徒をどう指導すればいいのか。でもそのような生徒も必ず授業にはやって来て、そして聞いていないようで私の指示に従っていました。先日感動したのは、1年前に教えたその生徒たちが2年生となり、卒業式のとときに校歌を元気よく歌っていたことです。ポケットに手をつっ込んでいたような男の子も、一生懸命に歌っていました。私が教員という仕事のやりがいを感じた瞬間でもありました。

教員を目指すとなると、授業作りや指導力など、まだまだ私には足りないことだらけです。インターンシップでお世話になる附属中学校での授業や行事から、先生方が生徒たちに伝えている「何か」を知る機会をいただけること、ものすごく感謝しております。

◆◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◆

福井県特別支援教育センターの「学校支援」 実践事例報告

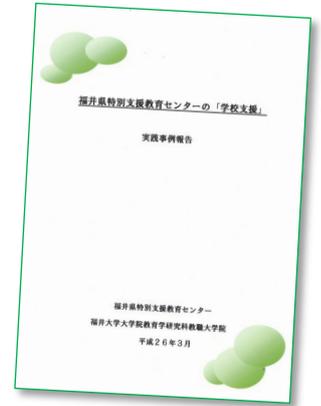
福井県特別支援教育センター（平成26年3月）

平成23年度、福井県特別支援教育センターは今後の特別支援教育の方向性としてのインクルーシブ教育の実現を見据え、大幅な組織改革と業務の見直しを行なった。そして、個々のケースへの支援から、各学校の特別支援教育体制づくりを支援する学校支援へと業務の軸を転換し、学校支援の実践研究をスタートさせた。

特別支援教育センターには各学校から対象となる子どもに関する相談がよせられる。特別支援教育センターの所員は、個々のケースを糸口として学校に出かけて行き、学校の中で中核となる人と協働しながら、気がかりさを抱える子どもや担任を支える自律的で協働的な仕組みを学校の中につくりだす取り組みを進めてきた。

当然のことながら、子どもの状態像や子どもを取り巻く状況、学校の現状は多種多様であり、学校が抱える課題も個別具体的である。孤軍奮闘しがちな学級担任を校内で支えるための仕組みをどのようにつくりだすのか、気がかりさを抱えた子どもを含んだ授業づくりをどのよ

うにサポートすれば良いのか、校内の教員を繋ぎ互いの授業に学び合う仕組みをどのようにつくりだしていくのか、ともに子どもを支える教員同士の関係をどのように紡ぐのか…。個別具体的な課題に対し、センター所員は学校での実践とその振り返りを積み重ねることを通して次の展開を生み出してきた。本報告書は、学校における実践とセンターでの振り返りの往還によって紡がれてきた、特別支援教育を核とした学校づくりの物語集である。所員の足跡をたどることを通してみえてくる子どもたちの育ちと学びを支える教師の成長、そして教師集団の成長過程が、読み手の実践を後押ししてくれるであろう。（笹原未来）



平成25年度特別支援教育専門研修

ステップアップ研修・授業研究リーダー研修 実践研究報告

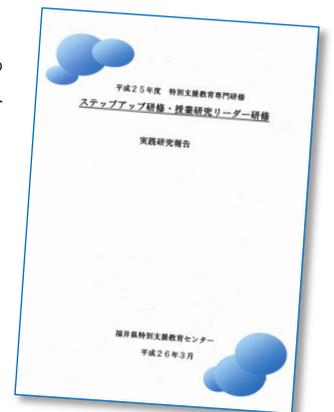
福井県特別支援教育センター／福井大学大学院教育学研究科教職大学院（平成26年3月）

福井県特別支援教育センターでは平成24年度より特別支援教育コーディネーターを対象とした「ステップアップ研修」と、通級指導担当者や特別支援学級担任、特別支援学校教員を対象とした「授業研究リーダー研修」を始めた。これは、福井大学教職大学院、福井県教育委員会との連携事業であるミドルリーダー研修に位置づけられるものである。本研修の大きな特色は、研修者の個人研修、個人研鑽にとどまらず、“特別支援教育”を核とした校内組織の活性化を図ることを目的としていることから、学校を拠点とした研修となっている点にある。研修者は自身が所属する学校が抱える課題をそのまま研修課題に据え、学校の同僚と協働しながら研修を進めていくことになる。研修者は自身の学校でそれぞれのテーマに基づいた実践を進め、センターにおける研修でその実践の振り返りを行ない、次のステップの足場を採るのである。また、センター所員や教職大学院のスタッフは学校へ訪問し授業研究会等に参加することを通じて学校の取り組みをバックアップしてきた。

平成25年度の「ステップアップ研修」には県内の小学校より3名の特別支援教育コーディネーターの受講が

あった。気がかりさを抱える子どもの担任を支える仕組みづくり、障害理解授業を通じた特別支援教育の取り組み、特別支援教育の視点で進められる授業研究会…。それぞれの学校の事情に応じて様々な切り口から校内の特別支援教育体制づくりが進められており、本報告書を通して特別支援教育の多様なあり様が浮かび上がってくる。また、「授業研究リーダー研修」には、県内の5つの特別支援学校より6名の先生の受講があった。授業研究会のあり方の検討を通して、授業そのもののあり方を問い直す作業を丁寧に積み重ねてきた各研修者と学校の1年間の歩みが本報告書には描かれている。

本報告書を手にした読み手によって、学校としての特別支援教育の力量を高めるための新たな取り組みが生み出されることを期待したい。（笹原未来）



書評

「わかり方」の探究 — 思索と行動の原点 —

著：佐伯胖（小学館，2004年）



「教師は授業が命である。子どもたちにとってわかる授業をめざし授業改善に取り組まなければならない。」多くの教師がそう思い日々授業に取り組んでいる。しかし、「わかる」ということはどういうことなのだろうか振り返ってみたいことはあるだろうか。

本書は、わかるということについて深く考察した書であり、授業改革・改善への多くの視点が得られる本である。私は、とりわけ第1章で展開される「できる」と「わかる」のとらえ方にはっとさせられた。筆者によれば、学校教育では一体化であるべき「わかる」ことと「できる」ことを分離して捉える傾向があり、教員の中には「わかる」の偏重への批判として、「できる」ことのほうが「わかる」ことよりもっと大切だという主張がある。筆者はその場合の彼らの根拠を次のように（1）基礎学力の訓練重視（2）教授目標の明確化（3）生きて働く学力の重視 の3つにまとめ（ここでは紙面上全文ではなく一部を紹介する）論じた後で、その問題点を指摘している。

（1）基礎学力の訓練重視について

ものごとを深く広く「わかる」ためには、どうしても必要な基礎技能があり、基礎技能が「できる」ようにならないければ複雑な教科内容が「わかる」はずがない。漢字が読める・書ける、四則演算が素早く計算できるなどの基礎技能は練習を重ねしっかりと身につけておかなければならないことである。「わかる授業」「楽しい授業」ばかりを強調して、そのような基礎技能の訓練を怠ることは、基礎学力の低下をもたらし、高学年になって複雑な内容の教科を習得する際に大きな障害となる。

（2）教授目標の明確化について

子どもが何かについて「わかる」といっても、子どもが本当に「わかった」か否かは、結局のところ、何かの行為が「できる」か否かで判断し評価するしかない。子どもが何をどこまで習得すべきかの目標を明確にするには、子どもたちがどういうことが「できる」ようになるべきかを明らかにすることである。（中略）授業の教授目標を「子どもをどういうことについてどこまでできるようにすることか」という形で明確にすることは、授業活動を計画的で体系立ったものにするために大変役に立つ。

（3）生きて働く学力の重視

知識というものは、頭の中でわかっていても、それが現実場面で生かされなければ、真に「身につけている」とはいえない。ここで、「現実場面で生かす」というのは、現実の世界で遭遇する諸問題を適切に解決することが「できる」ということである。「わかる」とか「納得する」とかいつても、いざというときに正しい行為が「できる」のでなければ、それは本当に「わかった」とか「納得した」とはいえないのではないか。例えば道徳教育にで「人に親切にすることは大切である」ということが「わかって」いるといっても、現実、電車の中で老人に席をゆずったり、困っている人を助けたりすることが「できる」ようにならないければ何にもならないだろう。

これら3つの考え方のある部分については私自身も大切だと思うことであるが、著者はそれらの考え方の問題点を次のように指摘する。

（1）の基礎学力の訓練重視説の問題：読・書・算ができることは望ましいが、ただ単に感じの書き取り練習や計算練習をひたすら課していくのがよいと考えるならばむしろ有害。いわゆる「基礎学力」というものを抽出して練習させるということは、知識の文脈性（文化的意義）に対する注意を奪う副作用をもつ。そして、その副作用は根強く残り、他の教科の学習態度にも転移して、「勉強」というものは常に意味のない練習で成り立つものだという誤った考えに陥らせてしまう。

（2）の目標明確化説の問題：教育目標が明確であることは望ましいが、子どもがどういうことについて「できる」べきかを、ひとたびリストアップすると、そのことだけを指す活動が教師にも子どもにも生まれる。「〇〇ができる」次に「△△ができる」というように授業が進められるとき、「私たちが一度わかったことをさまざまな文脈の中にはめ込んでみて、もう一度迷い直し、そしてわかり直したり、やはりそうだったのかと納得したりする、自由で、気ままに、それでいて充実した吟味活動」が失われていく。新しい問題状況でも「できる」ためには、問題状況の意味や含まれる概念が「わかる」必要がある。「わかる」を徹底的に経由して本当に「できる」ときこそ「できる」のではない。

（3）生きて働く学力説の問題

「本当にできる」ということは、現実生活で知識や技能を生かし、発揮することだという考え方は、文字通り、文句のつけようのないことである。しかし、これはもう「望ましい人間像」を心に描き出して、そういう「理想的人間」はどんなことが「できる」かを空想しているに過ぎない。（中略）「わかる」ということは、実感として「なるほど」と納得することだと考える。そのことが本当に「できる」と対立するとは思えない。

これら3つの指摘は、私たちに学びの本質を問い直す視点を提供してくれる。著者は、いろいろなことが「できる」ことが望ましいが、できるようにするために、教えることを体系的に集めたような活動では、1つができた次、また1つできた次と短絡的になり、「できる」の背後にあるべき「わかる」の豊かな世界が見失われることにもなりかねないと教え込みの危険性を指摘する。

教えるということは知識の伝達ではなく、わかろうとする子どもたちに、教師自身もまだ分かっていない存在として、もっとわかろうと子どもたちと協働で学び合う、そのような授業を目指したいものである。

本書の中で書かれているものはどれも、近年に書かれたものではない。しかし、現在においても授業改革・改善の確かな拠り所となるヒントが詰まっている。読んでいない方はぜひ一読を。（二宮秀夫）

◆福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻／スタッフ専門分野一覧

柳澤昌一	専攻長／教授	社会教育学
寺岡英男	副学長／教授	教育方法学
松木健一	教授(副専攻長:改革)	教育臨床心理学
森透	教授(副専攻長:総務)	教育実践史
松田通彦	教授(副専攻長:涉外)	教育行政マネジメント
二宮秀夫	教授	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
小林真由美	准教授	カリキュラム・授業改革
稲垣良介	准教授	カリキュラム・授業改革(保健体育科教育)
岸野麻衣	准教授	幼児教育
木村優	准教授	教育学
小林和雄	准教授	理科教育・授業改革マネジメント
宮下哲	准教授	授業改革マネジメント
風間寛司	准教授	数学教育・教員研修組織化
天方和也	准教授	授業改革マネジメント／附属特別支援学校
青木美恵	准教授	授業改革マネジメント／附属小学校
西村美貴穂	准教授	授業改革マネジメント／附属小学校
森田史生	准教授	授業改革マネジメント／附属中学校
笹原未来	講師	特別支援教育
山野下とよ子	特命准教授	算数・数学教育
前園泰徳	特命准教授	環境教育
杉山晋平	特命助教	多文化共生教育
藤井佑介	特命助教	教育方法学
半原芳子	特命助教	言語教育学
玉木洋	客員教授	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
鈴木寛	客員教授	教育行政マネジメント
荒瀬克己	客員教授	教育行政マネジメント
西川満	客員教授	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
小嵐恵子	客員教授	コミュニティとしての学校と教師の力量形成・障害児教育
巨田尚彦	非常勤講師	カリキュラム・授業改革
松井富美恵	非常勤講師	障害児教育・教師教育
山下忠五郎	非常勤講師	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
富永良史	非常勤講師	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
中川美津恵	非常勤講師	コミュニティとしての学校と教師の力量形成

実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables:
Spring Sessions
For Reflective Practice
And Organizational Learning
in University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2014 summer sessions

福井大学総合研究棟V (教育系1号館)
/AOSSA

2014.6.21-22

Schedule

- 4/19 sat-4/20 sun 合同カンファレンス 4/26 sat-4/27 sun 合同カンファレンス (予備日)
5/17 sat 合同カンファレンス 5/24 sat 合同カンファレンス (予備日)
6/21 sat-6/22 sun 実践研究福井ラウンドテーブル 2014
7/5 sat 合同カンファレンス 7/12 sat 合同カンファレンス (予備日)

【編集後記】

花が咲き揃い、桜の花が舞う季節となりました。多数の新しいメンバーを迎え、教職大学院も新たなスタートをきりました。巻頭言や新しいメンバーの自己紹介等、ニュースレターでも教職大学院に吹く新たな風を感じていただけるのではないかと思います。

今年度はニュースレターの構成についても一部リニューアルし、院生の実践報告や各学校の取組、スタッフの研究紹介等、多数盛り込んでいきたいと思っております。ご期待下さい。今年度も宜しくお願い致します。(笹原)

教職大学院Newsletter No.62

2014.4.19発行

2014.4.19印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp

